

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 30 日現在

機関番号：32630

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520175

研究課題名(和文) 撮影所システム崩壊後の日本映画の製作体制：インタビューを中心とする総合的研究

研究課題名(英文) The production systems of Japanese Movies after the collapse of studio system

## 研究代表者

木村 建哉 (Kimura, Tatsuya)

成城大学・文芸学部・准教授

研究者番号：10313181

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の最大の成果は、伊地智啓著『映画の荒野を走れ：プロデューサー始末半世紀』(上野昂志・木村建哉編、インスクリプト、2015年4月)の刊行である。編者の木村は本研究の研究代表者、上野は研究協力者である。本書は、1960年に日活に入社し、1971年にプロデューサーに転じ、1970年代後半以降は独立系のプロデューサーとして撮影所システム崩壊後の日本映画界を2000年代まで牽引し続けてきた日本映画史上有数のプロデューサー伊地智啓への、10回以上に渡るロングインタビューをまとめたものであり、今後の日本映画研究に必須の第一級の資料となった。

研究成果の概要(英文)：The biggest and most fruitful achievement of this project is the publication of the book by Kei Ijichi, Eigan Kohyawo Hashire (in Japanese), edited by Kohshi Ueno and Tatsuya Kimura, Inscript, April 2015. Kimura is the leader of this project and Ueno is a cooperater of it. The book is based on interviews (more than ten times) aided by this project. Ijichi entered Nikkatsu in 1960 as an assistant director, and became a producer there in 1971. He then became an independent producer in late 1970's and played a leading role until 2000's after the collapse of studio system in Japan. This book provides very important documents about Japanese movies and movie industry from 1960's to 2000's, and will be essential for film studies and film history researches on Japanese movies and Japanese movie industry.

研究分野：映画学

キーワード：日本映画 撮影所システム 伊地智啓 1960年代 1970年代 1980年代 1990年代 2000年代

### 1. 研究開始当初の背景

テレビに観客を奪われた映画の興行収入・配給収入は1960年代半ば以降には激減した。その結果、多数の映画を一定のペースで一定のレベルを維持しつつ製作するために、そしてそのことで成り立っていた撮影所システムは、維持することが次第に困難となった。1970年代初頭には日本映画界に於ける撮影所システム(スタジオ・システム)はほぼ崩壊しており、それは、1971年の大映の倒産と日活の製作中断として如実な形で現れた。しかし、崩壊したかに見えた撮影所システムは、71年の日活のロマンポルノ路線への路線変更により、辛うじて、部分的にはあられ維持された。

ロマンポルノ路線によって、一定数の観客が、一定のペースで映画館に足を運んでくれるようになったからであり(当時は、アダルト・ビデオのレンタルも、成人向け動画のインターネット配信もなく、日活ロマンポルノのライヴァルとなり得たのは、はるかに予算規模の小さい「ピンク映画」や、日活ロマンポルノの影響を受けつつ、その後を性表現の過激さをより抑制した形で追った東映のエロ・グロ路線の映画くらいに限られたからである)日活は、決して小規模とは言えない人員削減を行ったとはいえ、製作スタッフ(技術スタッフ)を常勤社員として雇い続けて撮影所システムを何とか維持し、1950年代から1960年代初頭の黄金時代の日本映画の伝統を後の時代に継承することに多いに貢献したのである。撮影所システムが維持されたことは、スタッフの水準の維持に止まらず、撮影所システムに支えられた傑作・名作が日活ロマンポルノの中から生み出されることにもつながった。日活ロマンポルノは、からみ(セックス)のシーンを一定数(10分間に一度がおおよそ目安である)入れておきさえすれば、その他の制約はほとんどなく、実験的・前衛的な試みが可能だったことも、その水準を上げることにつながった。

このように、日活のロマンポルノ路線への路線転換は、それ自体として日本映画史上において重要な意味を持つのみならず、日活ロマンポルノの製作・制作現場で育ったスタッフ達の多くが、1970年代後半以降には独立系(インディペンデント系)の映画製作・制作へと転じ、その後の日本映画の復興と興隆に多大なる貢献をしたという点でも極めて意義深い。

しかし、従来の日本映画史研究、映画学研究では、ポルノへの偏見も手伝い、日活のロマンポルノ路線への路線転換の実態がいかなるものであり、またそれが、1970年代後半以降の独立系(インディペンデント系)の映画製作の興隆とどのような関係を持つかについての学術的で具体的な調査・研究は皆無に近かった、というのが実状であり、そうした実状は、近年ではやや改善の傾向が見られるとは言え、本研究開始時点ではまだまだ支

配的なものであったといわざるを得ない。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、映画学者・日本映画史研究者である研究代表者木村建哉と研究分担者中村秀之、藤井仁子が、1960年代後半から映画評論家として活躍し、独立系の映画のプロデューサーを経験したこともある研究協力者上野昂志と共同して、実作者であり1970年代以降の映画製作現場を経験してきた研究協力者榎戸耕史監督、1980年代以降に独立系の映画製作現場と大手映画会社の映画製作現場を経験してきた研究協力者富樫森監督等の協力を得つつ、資料調査を行い、その結果も踏まえて、映画製作関係者へのインタビューを行い、その成果を中心として1970年代から2010年代に至る日本映画の製作体制を明らかにすることである。

より具体的には、日活のロマンポルノ路線への路線転換、日活ロマンポルノ初期の製作・制作の実態、日活ロマンポルノを支えたスタッフ達の独立系路線への転出・進出、その後の日本映画の製作状況の変化(特にテレビ局の企画・出資による映画の増加との関係において)等々を詳細に明らかにする必要がある。

併せて、現在の映画製作状況に関しても、撮影所システム崩壊後の日本映画の製作体制の変容という視点から捉え直す必要があり、そのためにも資料調査やインタビューが必要となる。

### 3. 研究の方法

1960年代(撮影所システム崩壊期)から2000年代を中心として、資料調査を行い、それに基づいて、伊地智啓プロデューサー、森崎東監督、およびその映画製作の関係者、2010年代に大手映画会社配給の映画を手掛ける映画監督富樫森(研究協力者)や中村義洋らにインタビューを行い、そうしたインタビューの成果を通じて、あるいはそれを踏まえて、撮影所システム崩壊以降の日本映画の製作体制を明らかにする。

併せて、現在映画製作・制作に関わる関係者についても、資料調査を踏まえてのインタビューを行う。

### 4. 研究成果

本研究の最大の成果は、伊地智啓『映画の荒野を走れ:プロデューサー始末半世紀』(上野昂志・木村建哉編、インスクリプト、総頁357頁+xxiii、2015年4月)である。共編者は、本研究の研究代表者である木村と、本研究の研究協力者である上野である。本書は、本研究の助成により実現した伊地智への10回以上に渡るロングインタビューに、加筆・再構成を加えたものである(本書の一部は本研究の研究代表者木村と研究分担者中村・藤井の共編著『甦る相米慎二』(2011年)に既に収録されていたイン

タビユーの再録であるが、その部分に関しても、本研究の成果を踏まえての加筆・修正が行われている。

当初は、3-4回実施する予定であった伊地智啓へのインタビューは、黒澤満プロデューサー同席でのものも加えて10回を超えた。これは、伊地智啓が日本映画史において果たしてきた大きな、そして多様な役割を詳細に明らかにすることを通じて1960年代初頭の撮影所システムの最盛期からその崩壊、そしてその崩壊以降の日本映画の製作体制の変容を解明するためのものであった。なお、インタビューに当たっては、研究協力者である榎戸耕史・富樫森両監督の協力を得た。両監督は、伊地智啓が製作を手掛けた作品に、助監督及び監督として関わっており、両監督からの助言は、インタビューを行う上で大きな力となった。

伊地智啓は、1960年に日活に助監督として入社し、1971年に日活の路線変更を受けて日活ロマンポルノのプロデューサーに転じ、1970年代後半以降は独立系のプロデューサーとして、撮影所システム崩壊後の日本映画界をリードし続けてきた。テレビの2時間ドラマの制作者としても先駆者の一人であり、その流れもあって、テレビ局が企画及び出資に関わる映画製作についてもその初期からの様態の変化を具体的に知悉している。伊地智啓は、まさに日本映画史上最も重要なプロデューサーの一人であり、本ロングインタビューは、1960年代から2000年代までの日本映画界の実状に関する第一級の資料として、今後の日本映画研究になくてはならないものとなった。なお、本書は既に映画研究者達に引用・言及されているのみならず、『キネマ旬報』主催の「映画本大賞2015」において、2015年に出版された700冊を超える映画書の中で第3位に選出されるなど、高い評価を得ている。

本研究の主要な成果としては、藤井仁子編『森崎東党宣言!』(インスクリプト、2013年11月)も挙げることが出来る。本書は、1960年代から2000年代の日本映画界を代表する監督森崎東についての論考(本研究の研究分担者中村と藤井によるものを含む)、関係者へのインタビュー、森崎本人へのインタビューの集成である(インタビューの一部には既発表のものも再録が含まれるが、本書の中核を成すのは、本研究計画の助成により実現した新規のインタビューと論考である)。本書も、『キネマ旬報』主催の「映画本大賞2013」において第8位に選出されるなど、高い評価を受けている。

以上のように、本研究は、1960年代から2000年代を代表するプロデューサーと監督とについて、それぞれ重要な資料、研究成果を公開し得たと言える。

本研究計画では更に、現在の日本映画製作体制を明らかにするために、富樫森監督

と中村義洋監督とに、それぞれ『おしん』(2013年公開)と『白ゆき姫殺人事件』(2014年公開)の制作に関してインタビューを行った。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 6件)

中村秀之、ゆく者を送るまなざし—高峯秀子と 顔 の時間、ユリイカ、査読無、47巻6号、2015、117-124

中村秀之、高倉健と特攻隊映画—東映仁侠映画の時期における、ユリイカ、査読無、47巻2号、2015、125-132

木村建哉(聞き手・構成)、「富樫森監督、映画『おしん』を語る」、成城文藝、査読有、226号、2014、pp.62(85)-40(107)

中村秀之、喜劇の到来—森崎東のレジスタンスをめぐる覚書、藤井仁子編著『森崎東党宣言』、インスクリプト、査読無、2013、61-77

〔学会発表〕(計 4件)

木村建哉、古典的物語映画における三度の反復の効果、美学会、2014年10月13日、九州大学大学院人文科学府(福岡県福岡市)

中村秀之、歴史の関を越える—『虎の尾を踏む男達』(1945/1952)の神話・事実・寓意、日本映像学会東部支部映像テキスト分析研究会、2014年4月12日、立教大学現代心理学部(埼玉県新座市)

〔図書〕(計 2件)

伊地智啓著、上野昂志・木村建哉編、インスクリプト、映画の荒野を走れ:プロデューサー始末半世紀、2015、357

藤井仁子(編著)、インスクリプト、森崎東党宣言、2013、430

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

取得状況(計 0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年月日:

国内外の別：

6．研究組織

(1)研究代表者

木村 建哉 (KIMURA, Tatsuya)

成城大学文芸学部・准教授

研究者番号：10313181

(2)研究分担者

中村 秀之 (NAKAMURA, Hideyuki)

立教大学現代心理学部・教授

研究者番号：00299025

藤井 仁子 (FUJII, Jinshi)

早稲田大学・文学学術院・准教授

研究者番号：40350285